

自己評価報告書(最終報告)

報告者

言語系コース(国語)
／黒田 俊太郎

■平成24年度の目標に対する自己点検・評価

I. 学長の定める重点目標

I-1. 科研費申請に向けた計画等

国立大学法人運営費交付金は年々削減され、教員の研究費配分も厳しくなっており、教員各自が研究のための外部資金を獲得しなければならない状況である。そこで、科研費申請に向けて、あなたが考えているテーマと計画等について示してほしい。

1. 目標・計画

私が科研費申請に向けて考えているテーマは、今日では自明のものとなっている文学／科学の間の境界線に関わる言説を発掘・調査し、それらを歴史的な時系列に沿って理論的に分析することで、日本の〈近代化〉の様相を再考する新機軸を提出するというものである。

日本の〈近代化〉は、科学を知のヒエラルキーの頂点とする科学主義の流入と不可分であり、この考えは、文学／科学の間に強固な壁を設定したといえる。だがその一方で、〈近代文学〉はその方法論・主題に於いて科学を取り込みながら、互いの境界線を画定していった。このような観点から、〈文学者／科学者〉の言説レベルの相互作用を析出し、現代日本にも連続する精神構造上のパラダイム転換を測定しようと考えている。

10月着任直後の提出なので、計画は特になかったが、最善の努力を持って、書類作成に臨みたい。

2. 点検・評価

昨年日本学術振興会へ申請した、平成25年度科学研究費助成事業(若手研究(B))については、不採択という残念な結果であった。10月着任直後の申請ということもあったが、計画が十分練られていなかった事を反省している。ただし、〈文学／科学の間の境界線に関わる言説を発掘・調査し、それらを歴史的な時系列に沿って理論的に分析する〉というテーマ自体は、今後も考究すべきものであると考えており、引き続きテーマとして持ち続けていきたい。計画作成上での反省点は、研究の成果として、論文以外にも目録など形に残るものを作成するよう計画すべきだった。本年度は、そうしたことを意識し、文書を作成したい。

I-2. 大学院学生定員の充足に向けた取り組み

専攻・コースのこれまでの大学院学生定員の充足状況を踏まえた上で、あなたは定員充足のためにどのような取り組みを行うか、具体的に示してほしい。

1. 目標・計画

平成24年10月1日現在の、大学院学校教育研究科(修士課程・専門職学位課程)における入学定員は言語系コース(国語)に関する限り、35名である。実際の在学者数は男女あわせて33名であり、定員が充足しているとはいえない。むろんこうした数字は年度ごとに変動するゆえ、充足する年度もあるだろうが、安定的に充足させる方策は、考慮されねばならない。とはいえ、一大学教員ができることはさほど多くはないかもしれない。日々研究に励み、その成果を学生目線にたって還元していくことが大切になってくるだろう。そうすることで自身の指導している本学の学部生の、大学院への進学意欲を高めていくことが可能となる。また高い学力と熱意を持った学生を他大学からも集めてくることも大切であろう。そのために私は、学会等で他大学に行った際、知人や知人を介して知り合った研究者に本学の魅力を伝えることで、そうした研究者が指導している学部のゼミ生を本学に入学させてもらうように積極的に働きかけるなどの努力をしたい。

また、これは私が直接行うことではないが、本学の大学院を修了し、現職教員となった方を本学に招聘し、学部生に大学院進学のメリットを講演してもらうということも、学部生の進学意欲の向上につながると思う。そのために、本学と本学の学部・大学院を卒業した現職教員とのつながりを同窓会組織の緊密化などにより強固しておく必要がある。これは、①同僚に本学の大学院への入学を勧めてくれる、②知人に本学の大学院への入学を勧めてくれる、③機会のあるごとに本学の良さを社会に喧伝してくれる、④本学の教員もこれらの動向を観察することで大学院学生定員の充足に向けた新たな取り組みへのヒントを得られる、等々のメリットがあると思う。

2. 点検・評価

大学院学生定員の充足に向けた取り組みとして、私は二つのことを目標にしていた。第一に、内部進学者を増加させるために、より魅力的な授業を学部生に行い、進学意欲を高めるといったものだ。そのためには、自身の行なっている研究の成果を、学生が教壇に立つときに役立てられる知識・方法へと変換し、授業の中に盛り込むことで還元する必要があるだろう。昨年度は三名が内部進学を希望し、実際に入学してきたが、教員養成系大学でしっかりと土台を積み上げてきた学生の存在は、大学院に入ってから教員を目指すような院生にとっても大きな刺激となり、良い循環がうまれるのではないだろうか。自分自身の授業についてだが、やはり、着任したばかりということで、学生の学年ごとの到達度合いや、受講人数の予測などが、十分ではなかったと反省している。本年度はその点に留意し授業を行いたい。

目標の第二には、学会等で他大学に行った際、研究者仲間に本学の魅力を伝え、指導生を本学に入学させてもらうよう働きかけるといったものだった。多くの研究者は自身の大学院に進学させたいと考えているゆえ、結果につながるようなことはなかったが、今後もこれは地道に続けて行きたい。一方で、大学時代の友人・知人で中高の教員になった人たちに、本学の紹介をするなどの活動も行うようにしている。

II. 分野別

II-1. 教育・学生生活支援

1. 目標・計画

着任したばかりで、大きなビジョンがあるわけではないが、早速担当することとなったゼミ生に、優れた卒業論文・修士論文を作成させることに、重点を置いている。

ゼミ生には、週2回のゼミの場を提供し、片方ない両方にも出席をすることを可能にしている。このことにより、迅速かつその時に応じたアドバイスができる体制をとっている。

2. 点検・評価

ゼミ生の卒業論文・修士論文指導を重点的目標にあげていたが、これについては的確な指導ができたと思っている。提出期限間際に慌てて執筆するようなことがないよう、執筆計画を入念に立てさせ、それが十分な調査と分析につながったと考えている。今後もゼミ生への充実した指導を継続していきたい。

II-2. 研究

1. 目標・計画

これは、学生への教育支援にもつながることだが、鳴門教育大学の図書館に、国語教員として自律していくために、必要で、適切かつ重要なデータベースや書籍・雑誌を紹介し、適宜納本してもらうことを心がける。

自身の研究の具体的な計画としては、残り半年で、日本浪漫派の作家中河與一の形式主義論における理論的基盤の変容について分析したい。

2. 点検・評価

研究環境の充実化を図るという観点から、資料の調査に有効なデータベースの導入を目標の一つに掲げていたが、コースの先生方のご理解とご尽力により、研究環境が整いつつある。今後も適切なデータベース・書籍・雑誌の導入・納本が行われるよう、図書館などに働きかけを行っていきたい。また、日本浪漫派の作家中河與一の形式主義論における理論的基盤の変容について分析することを目標に掲げていたが、これについても一本の論文にまとめ、投稿することが出来た。

Ⅱ-3. 大学運営

1. 目標・計画

やはり、着任したばかりで、大きなビジョンがあるわけではなく、またどのような仕事があるのかも把握できていないので、残りの半年間で仕事内容を的確に把握し、率先してそれらの仕事を引き継いで行きたい。

2. 点検・評価

着任時期が年度の途中ということもあり、各種委員会委員として活動することはなかったが、所属コースの業務の内容の把握と、業務の実施に努めた。

Ⅱ-4. 附属学校・社会との連携, 国際交流等

1. 目標・計画

附属学校にはいまだ伺ったことはないが、現在指導にあたっている教育実践フィールド研究の学生が、来年の3月に附属小学校で授業時間3時間の教育実践を行うことになっており、まずは、この授業実践を通じて、学生とその授業を受ける生徒がより大きなものを得られるよう、日本近代文学の専門家という立場から適切に指導していきたい。

2. 点検・評価

指導にあっていた教育実践フィールド研究の学生が、本年3月に附属小学校で行った授業に参加した。小学5年生に聞く力、具体的にはインタビューする力をつけさせるという目標を持った授業で、被インタビューーとして小学生のインタビューを受けるなかで、文学にまつわる話などをした。今後もこのような授業研究会等に参加し、的確な指導・助言を行いたい。

Ⅲ. 本学への総合的貢献(特記事項)

研究環境の充実のため、適切なデータベースの導入に尽力した。また平成25年度科学研究費補助金について、研究代表者として一件、研究分担者として一件の課題を申請した。さらに、文部科学省特別経費「教員養成モデルカリキュラムの発展的研究」の推進にも貢献した。